

連珠っておもしろい

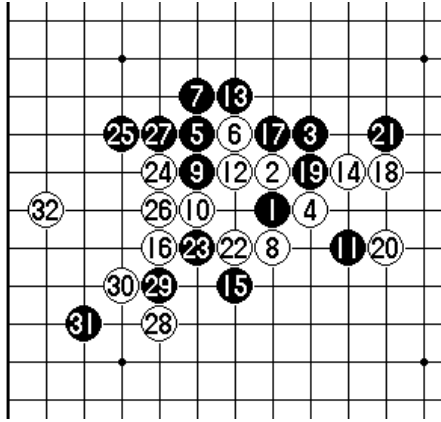
九段 河村典彦

● 第76回 ●

■ 実戦と詰連珠

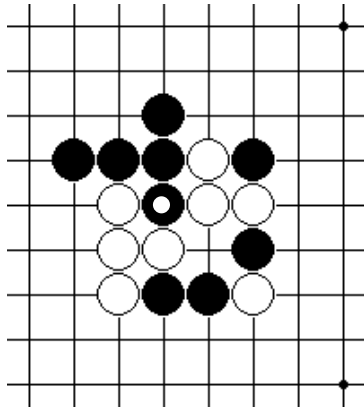
突然だが、まずは最近の実戦をご紹介します。京都リーグでの長谷川九段との一戦から。

黒 河村 白 長谷川
白32にて黒投了



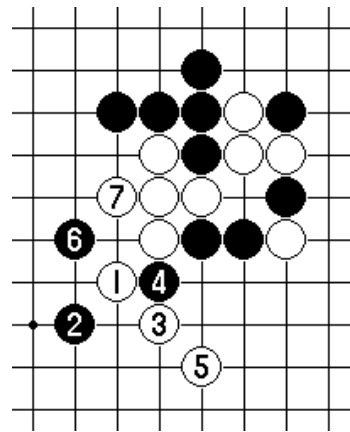
黒15までは挑戦手合い第1局と同じで、もちろん白16と引く手は研究していたが、白18、20の防ぎは

まったく視野に入っていなかった。黒21と当然の様に止めたが、これが敗着となつてしまった。ここは2路下に打つて、白24に黒25を下から止める必要があった。負けたのは仕方がないが、転んでもただでは起きないのが最近のやり方。すかさず詰連珠が作れないか検討した。最後の白の勝ち筋を生かしたのが次の図。

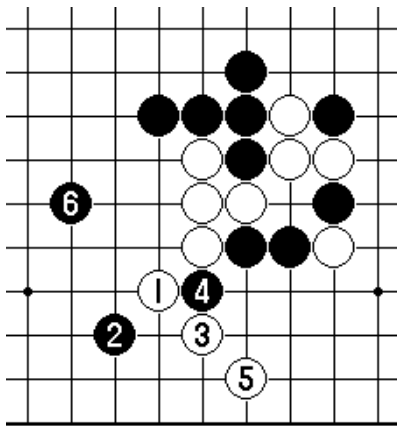


形も手順もまあまあなので合格点と思つていたら、最後の手順で余詰めが見つかった。白5と下に引いても最終形は同じになる。これも認めてもいいが、ちよ

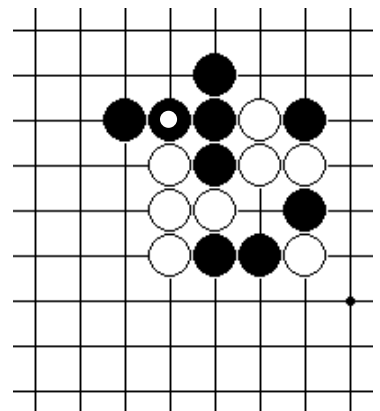
っと悔しい



そこで盤全体をずらして白5と引けば黒6と夏止めができるようにし、白5は6の一手にした。

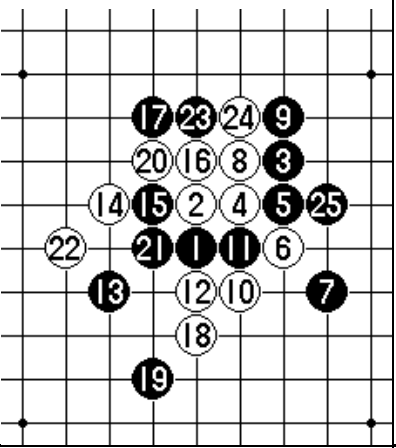


最終形は次のようになり、これで完成とした。



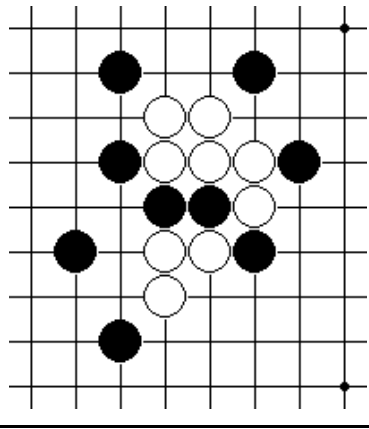
(印：天元の位置が異なる) これなどは詰連珠として出してもその工夫に気がつく人はいないだろう。しかし、こういう所に罠を仕掛けておくのもまた楽しみなのである。ではもう一局ご紹介しよう。

黒 長谷川 白 河村
黒25以下黒勝ち
王位戦の決勝で再度長谷川九段と当たったが、挑戦手合いの経験値を避けようと白10、12と古い作戦を使った。
白18と先に引いたのが悪く、黒25と先着されては

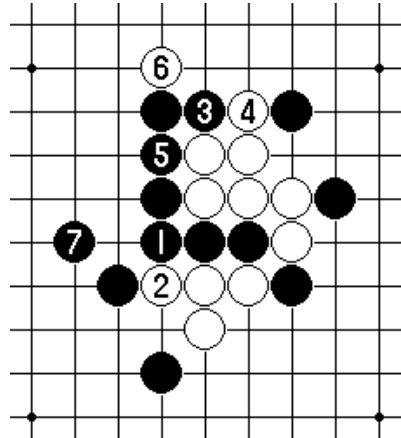


黒が圧倒的に有利で、以下黒に押し切られてしまった。白18が悪い手の理由は、黒21に白23と打つ手がないことで、この形を利用した詰連珠が作れそうだと直感した。

図がそのエキスを利用し

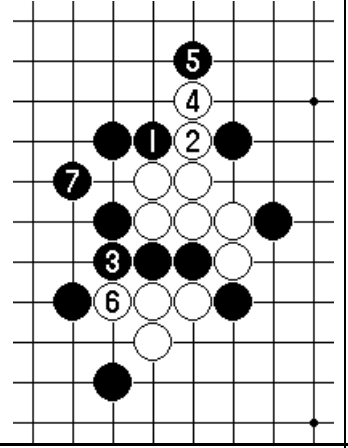


た詰連珠である。左側に並んだ黒石を利用することになるのだが、難度も手頃で詰連珠としてはまあまあだろう。

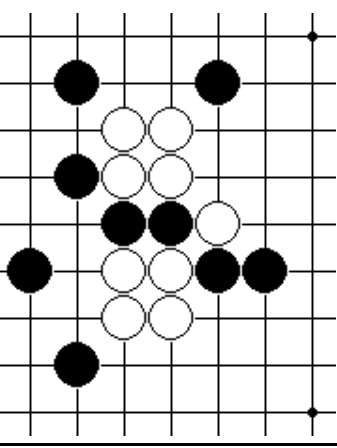


黒1と打った時白5と三で止められるのがばつと見怖いが、その時は下辺で四追いになるのが作意である。白2はやむを得ず、黒3と打って以下四追い、が正解となる。

これで何も問題がないようだが、もう一度見直してみると、先に黒3に打つても勝ちになることに気がついた。これは消しておかないとちよつと悔しい。

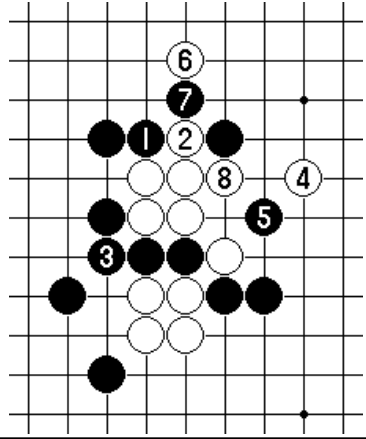


つまり、黒1を先に打つても白4を利かすだけでは黒勝ち消えない。そこで、右側の白の形を一工夫。



右辺の形を変えたのがわかるだろう。白の剣先を残すことにより、先手で左辺

に進出できるが、トビ四を2つ打つと黒に三が残るので、それで牽制している。



今度は黒1を先に打つと白2と止められ、それから黒3に打つと白4、6、8で三々禁になる。こうして黒1の手順前後を咎められるという訳である。

前にも書いたが、目指す詰連珠は

- ・石数10個以内
- ・手筋を含む

ことが必要であり、加えていかに解く気になってもらうことが重要である。そのためにはこじんまりとした形の方が望ましい。